

第13回すみの会参加
(2025.3)

銀座のかねまつホールで、第13回すみの会が会期を終えた。すみの会は、日本女子大学家政学部住居学科の卒業生たちの展覧会。墨絵と書が中心で始まった会で、住居の住と墨がかけられている。はじめは、私の卒論担当だった先生で第2回生。高齢化が進む中、25回生の私は、かなり若い方だ。第2回生といえば96歳である。そこへ今年から同じ2回生の新人が加入。さすがにどちらもトラブル発生だったが、無事作品は到着。毎回変わる運営係3人のうち、参加者の窓口担当になった私としては、38人の作品がキャンセルなく並べられたことだけで十分満足だった。

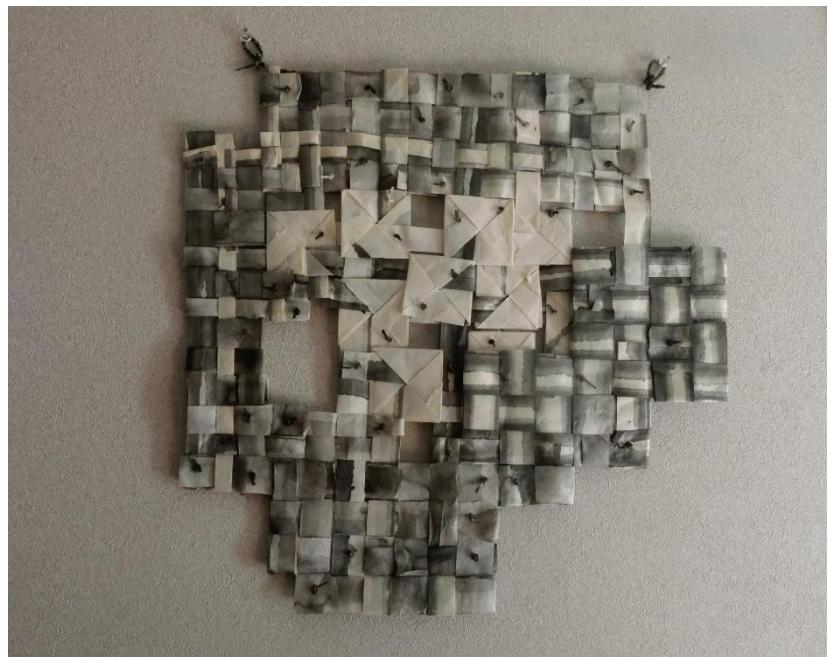


いつもではないのだが、今回の出品は、
「すみの会」らしく和紙と墨を使ってみた。

住居学科の卒業生なら誰でも参加可能なので、卒業後の経歴も様々。中には、プロの作家さんもいるし、まったくの初心者もいる。

基本は、白と黒というくくりはあるが、モノクロである必要はないし、分野も自由である。軸装された書や屏風もあれば額装のかな文字もあり。墨絵の大作もあればかわいらしい色紙もある。リトグラフ、水彩、写真、生花なども。回数を重ねるにつれて、陶芸などのクラフト系も増えてきた。今回、藤細工を始めた人が入ってきて、出品リストのジャンルの欄にバスケタリーが二つになった。私はずっとバスケタリーと書いていたのだけど、ある参加者から今回初めてこの言葉に気が付いたといわれた。なるほど、ある程度数がないと認識されないので。大阪の民藝館の玄関にバスケタリーの文字が堂々と掲げられて感激したのは、もう何年も前。バスケタリー展は36回目。なのに、言葉の知名度さえなかなかです。

はじめての入院と3か月のリハビリを経て、無事以前の一人暮らしに見事復帰した96歳の女性建築家の大先輩がこの会の求心力である。



樹皮布づくりトライアル
(2025.4)

長年、作品の材料を提供してくれている楮の樹。かなり根元に近いところから伐ることにした。今まで使ってきた枝よりだいぶ太い材が手に入る。その時は叩いて樹皮布=タバもどきを作つてみたいと思ってきた。その時が来たのである。



たまたま、昔見た樹皮布づくりの EC フィルムを、久しぶりに見る機会があった。あちらは一抱もありそうな大木。出来上がったのは、シーツのサイズだった。私の楮は太さ最大 7 cm だ。でも、表面の外皮を削ってから、まんべんなく叩いて皮を浮き上がらせて剥がし、さらに叩いて幅を広げていくという過程は同じ。紙のような繊細なものもできたし、糸のようにもなった。そして太いところのものはいかにも素朴な樹皮布。



幸い、作品も一つできたので、そちらのお披露目は第 36 回バスケタリー展で。
今年のバスケタリー展は、9 月 25 ~ 29 日。
会場は前回と同じ自由が丘 STAGE 悠

小さいかごのプロジェクト (2025.5)

ある懇親会の席で、大きい籠、小さい籠の話題になった。その後、ギネス級の大きい籠の情報などを教えてもらった。

現在、ギネス記録になっている世界最大のバスケットは、長さ 22m、幅 14.9m、高さ 12.4m、重さ 13.4 トン。

(<https://www.guinnessworldrecords.com/world-records/largest-basket>)

以前はポーランドの長さ 20m、幅 10m、高さ 10m のバスケット。

(<https://en.wander-book.com/giant-basket-in-towy-tomysl-m22184.htm?>) →写真あり

また、以前バスケタリーニュース 4 9 号で紹介したバスケットのかたちのビルについても現在の状況を教えてもらった。会社の業績が悪化し、建物は売られ、会社自体も買収されてしまったとのことである。

いつか見学に行ってみたかったのだが、残念。

(<https://www.worldrecordacademy.org/2023/5/worlds-largest-basket-building-world-record-in-newark-ohio-423221>)

さて、その流れで、小さいほうの話になる。米一粒にお経を書いていたりするらしいので、そのサイズのかごは?となつたが、話はそこまで。私の手ではギネス級は無理だ。でも小さいというテーマにちょっとそそられた。
というわけで出来たかご一式である。



手前の細長いのが高さ 35mm
一番右の丸いのは直径 15mm
素材もいろいろ、編み方もいろいろ。

虎屋のミニ羊羹の箱(15cmx8.5cm)に入れると
こんな感じです。



作っている途中、この制作の課題は、かごを編む前提でその材がどこまで細分化に耐えてくれるか、という素材とのせめぎあいであると知った。材の種類、性質ごとに対応は違ってくる。繊維一本にもなるが、そうなつたら縫りをかけるかなにか工夫しないと持ちこたえてくれない。
また、ただサイズだけを追い求めて、かごらしい魅力がなくなりそうだとも思う。
というわけで、結構勉強になった感じ。飲み会の皆様、きっかけを与えてくれて、ありがとうございました。

月桃・ゲットウ
(2025.6)

バスケタリーの仲間の一人が、自分の家に新しく月桃を植えたのだが、枯れた時のために、ここにも植えさせてと言って持ってきたのは十数年前。もともとは、沖縄あたりの熱帯性のもののはずだが、東京の環境が熱帯に近づいたのだろう、奥行のない狭い場所に溢れかえらんばかりに増殖している。土の中は一体化した岩石のような状態。これまでいったい何本切つただろうか。素材として使い切れない量になっている。

中庭の楮も5月にバッサリと伐ってもらったのにすくすく伸びた枝はすでに2階に届きそう。植物の力は、ある意味怖いくらい。私の役割は、育てるのではなく、殺しまくっている感じ。そのままゴミに出してしまえば、楽なのに、つい素材として助けてしまうのが困ったところ。

月桃は、ショウガ科の植物で、多様な使い方がされている。葉っぱで餅を包んで月桃餅。葉っぱや実で月桃茶。防虫スプレーも売っている。良い香りであるのに、虫は嫌うのだろうか？そして茎に見える部分の皮、葉鞘はバスケタリー材料。民具としては巻き上げ編みが一般的である。

去年、銀座の民芸品店たくみで、珍しく幅の広い平らな材が組まれている月桃のかごを見かけた。どうしたらこんな風になるの？と思う。私の経験では一枚ずつ剥がして乾かすと両端がくるっと丸まって全体が硬い棒状になってしまう。それを平らにするのは大変な労力なのだ。

後日、ユーチューブで解決法を見つけた！台湾かどこかの月桃細工。ざくざくと一枚ずつ剥がして、しごいて、くるっと丸めている。そうだ、樹皮の場合はそうしていたのだった。乾かし方の問題なのだから、樹皮だろうが葉鞘だろうが同じに決まっている。どうして樹皮のように外側を内にして丸めなかつたんだ？知っている方法なのに。

ハワイのバンダナスもそうだった。というわけで

自分の頭の固さを再認識した次第。それでもまだユーチューブのように手際よくはいかない。乾燥の状態？、気候の違い？伐る時期が悪い？…葉っぱの下方部は、偽茎を巻いて重なり層になっている。伐ったばかりの時は、しっかりと取り巻いて一枚ずつ剥がすのさえ厄介だ。乾燥が進むと剥がしやすくなるが、それも外側から順番に乾くから一度に何層も簡単にというわけにはいかない。樹皮やバンダナスとは状況が違う。でもユーチューブのおかげで平らに幅広く乾燥させることはできた。ところが、手探りで苦労して組んで作ったもののほうが、きれいだ。両側が丸まっていることで厚みがあるいい感じのプレイティングになっている。ペラっと一枚に乾いたものはそのままでは頼りない感じなのだ。ということはもっと改良の余地があるということか。それほど手間暇かからず、かつ最初に手探りで作りだした感じを取り戻すことは可能だろうか。

とにかく加工の技術がいかに難問かと再認識。そして、出来た材の均質性が大きく生産性にかかわることも身に染みる。バラバラの性質のものを一つに編むのは、時間も手間もかかるうえに、出来上がりの良し悪しに直結する。月桃は太さも違うし、根本と先の方では性質も違う。自然の植物を均質の素材にそろえるのは難しい。もったいないという感覚をわきに置かないと商品にならないということだ。ただ、バスケタリーの作品作りが目的である時には、話はまた別である。



開花時の月桃 2025.7.10 撮影

編袋ふたたび (2025.7)

VHS のテープが十数本あるが、機器がないので見ることはできない。昔のテレビを収録していたかご関連の場面の中には残しておきたいものもある。富士川の大きな筌の設置記録、ケニアのウズラ籠の一瞬の映像、など。そこでそれらしきものが写つていそうなテープを DVD に加工しておくことにした。届いたものを見ると、案の定残したかったのはごくわずかなものだったが、その中に、ニューギニア島の映像があった。背中全体を何も入っていない大きな編袋で覆い、畠作業をしている後ろ姿は、強く印象に残っていた。どう見てもあれは運搬具でなくコスチュームに見える。今回、ルーピングのテキスタイルが新生児を包んでいるような場面もあった。柔らかな手触りとはかけ離れた荒々しいテクスチュアだ。

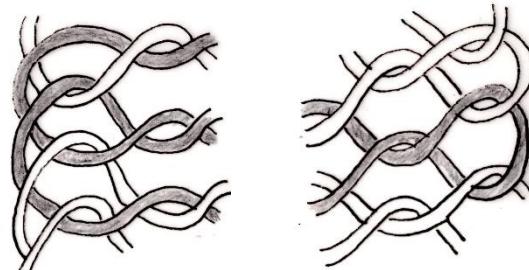
編袋については何度もバスケタリーニュースに書いてきたが、あらためて考える機会になった。

大阪の国立民族学博物館には、誰でも収蔵品が検索できるシステムがある。まず、どのくらい持っているかを調べてみた。つい使い慣れた「編袋」で検索したら一部しか出て来ない。どちらかというと「網袋」が優勢のようだ。漁網と関連する場合があるからだろうか。検索するには「アミブクロ」とすると良い。そのようにしてみても、当然持っているはずのものが出て来ないように思えるので、単純に比較はできないが、バスケタリーニュースの編袋コレクションも多彩さにおいては負けていない。

一見したところでは、ニットのかぎ針編みや棒針編みの編み目と似ていても、ここでいう編袋は、ルーピングやノッティング、リンクングといわれる組織で出来ている。一目作るごとに糸端をすべて引っ張り出さなくてはならない方法である。だからどこかが切れても穴が連鎖的に拡大すること

はない。糸の途中を引っ張り出す編み袋の方法は、切断された糸端を引っ張ると、ほつれが次々伝染してしまうかぎ針編みや棒編みとは、大きく違う。そしてこの方法では、長い材は不都合なのである。繊維状の材を脇に置いて、糸を少しづつ作りながら編むのが正攻法。糸づくりが分業できない。これは手仕事における大きな分かれ目だと思う。最近は若い人たちの間で編み物が人気らしいが、どうやら 100 円ショップで様々な糸が簡単に手に入ることが後押しになっているようだ。

民博にはメキシコのリンクングの編み台が収蔵されていた。まだ実物は見ていないが、このように台を使って糸を張るとやり易い。左から右へまず 1 本張ってから、前段の糸を拾いながらこの張った糸と一緒に常に右から左へ絡めていく。一本ずつ毎段絡めるより合理的な方法だ。よく見ると右の折り返しと左の折り返しは動きが違う。



筒状に編んでから底をつける。それは納得できたのだが、私が長年の宿題としているのはこれではない。同じくメキシコで、編み目は同じリンクング。でも違うのだ。両端とも右のタイプで、左右往復で編む。四角い袋で底はなく反対面とリンクしている。しかも既存の糸。長年の宿題は何回トライしても扉が開かない。敗北感ハンパない。どちらのタイプの袋も 1980 年代に収蔵されているが、解明できたほうが今でも作られているのに対し、わからないほうは、その時でさえもうあまり作られていなかったようだ。それから 40 年。BN コレクションにあるのは新品のように見えるが、作られた時期まではわからない。私がこの迷宮から出ることは永久に不可能なのだろうか。

新刊書「森を焼く人」

(2025.8)

新聞の書評欄に、かご作りへの言及がありそうな本を見つけた。最近発行されたばかりだったせいか、すぐに図書館で借りられた。「森を焼く人-自然と人間をつなぎ直す「再生の火」を探して-」

M.R オコナー 2025 英治出版 2700 円

近年、山火事の記事を見ることが多い。鎮火するために奮闘してくれている人たちの存在も目に入る。本書は、アメリカで活躍するジャーナリストが、自ら森林火災消防士の資格をとり、かつ、森林に火をつける火入れ活動への参加を通じて、火災消防の現場を描くノンフィクション。かなりの大著だ。

火を消す消防士であり、火をつける活動の実践者?有名な SF 小説に、焚書のために火をつける職業のファイアーマンが、昔のファイアーマンは火を消すのが仕事だったらしい、と驚く場面があったのを思い出したけれど、ここでは、両者は併存する。積極的に火の力を利用するのは、焼き畠ぐらいしか思い浮かばなかったのだが、森と火の関係はそう単純ではないようだ。

火を使って土地の世話をしながら生活していた先住民が犯罪人扱いされる一方、林の密度が高まって巨大化する森林火災の解決を、鎮火だけしてきた限界が見えてきているらしい。

籠づくりとの関連記述も出てくる。「かご編みから生まれた---先住民火入れネットワーク」。北カルフォルニアの、主にユロク族にかかる話である。火のつながりは精神的、あるいは靈的な文化背景もあるようだが、ここでは、かごとの関わりにとどめよう。

北カルフォルニアに住む先住民が作るベビー・バスケットは、火入れされた森に次の年に芽吹いたばかりの長くて細いハシバミの枝で編まれるそ

だ。この地域では 10 年ほど前、最期に火入れされてからずいぶんだってしまい、ハシバミの木にはかごの材料となる枝がまったくなくなっていた。そこで、森林火災消防士と地主と火入れ実践者が土地に火を取り戻すために先住民と協力して、火を再導入するようになった。このネットワークの活動は 9 年間続いているという。

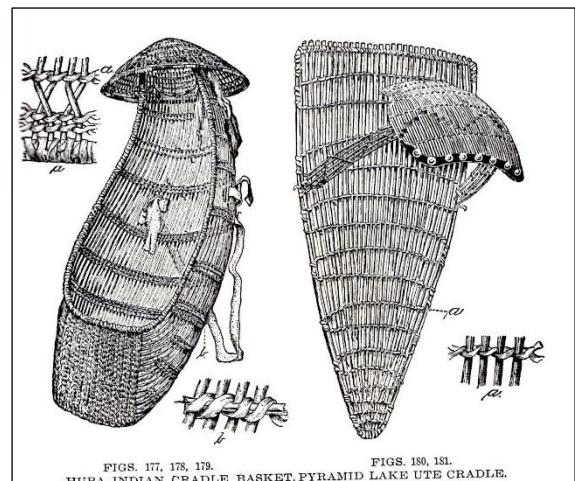
きっかけになったのは、ユロク族のかごの編み手の女性が、双子の孫が生まれるので運ぶかごが必要になったことだったという。この本には、かごの写真やイラストはないのだが、たぶんこのようなものであろう。



北カルフォルニア、フパ族のクレードルバスケットのミニチュア。ヘーゼル(セイヨウハシバミ)またはヤナギ。

“Indian Baskets” 178p S.P.Turnbaugh, W.A.Turnburgh

Schiffer Publishing Ltd. 1986



FIGS. 177, 178, 179.
HUPA INDIAN CRADLE BASKET. PYRAMID LAKE UTE CRADLE.

“INDIAN BASKETRY” 151p George Wharton James

Dover Publications, Inc. 1972

フパとユロクは隣同士 右は別の地域の先住民